

藤原伊織

Iori Fujiwara

Terrorist's
Parasol

第41回江戸川乱歩賞受賞作

パラソル

テロリストの



藤原伊織

Iori Fujiwara

Terrorist's
Parasol

第41回江戸川乱歩賞受賞作

パ
ラ
ソ
ル

講談社

ロ
リ
ス
ト
の



テロリストのパラソル

一九九五年九月一四日 第一刷発行

著者 藤原伊織^{ふじわら いおり}

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―一／郵便番号一〇二―〇二
電話 (〇三) 五三九五―三五〇五 (編集部)

(〇三) 五三九五―三六二二 (販売部)

(〇三) 五三九五―三六一五 (製作部)

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 黒柳製本株式会社



定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本に
ついてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あて
にお願いいたします。本書の無断複写(コピー)は著作権
法上の例外を除き、禁じられています。

©Iori Fujiwara 1995 Printed in Japan

目次

テロリストのパラソル	3
.....	

江戸川乱歩賞の沿革及び本年度の選考経過	312
---------------------	-----

江戸川乱歩賞授賞リスト	313
-------------	-----

第四十二回(平成八年度)江戸川乱歩賞応募規定	314
------------------------	-----

装帧
辰巳四郎

テロリストのパラソル

私と同時代を生きのびた友人たちに
そうすることなく去った友人たちに――

十月のその土曜日、長く続いた雨があがった。

目が覚めたのは、いつものように十時過ぎだった。蛍光灯のスイッチをいれ、いつものように窓から首をつきだした。陽のささない部屋の住人が、いつのまにか身につけた習慣だ。ひとつしかない窓からは隣のビルに手が届く。だが、空はみえる。ビルの輪郭にうすく切りとられた空にすぎないが、目に沁みる青さが久しぶりだった。セーターに腕をとおし部屋を出た。そんな日には陽射しのなかにいるのも悪くない。一日の最初の一杯にとって、陽の当たる場所も悪くはない。だがなによりそれは、晴れた日の私の日課だった。くたびれたアル中の中年のバーテンにだつて日課はある。

風はなかった。朝の光のなかを三十分ほど歩いた。甲州街道をぬけ、都庁をすぎて陸橋を渡る。公園の入り口近く、枯れた芝生の上で横になった。いつものポジションだ。ここしばらく身をひそめていた太陽は斜め頭上にあつた。土曜日らしく、家族連れがのんびり歩いている。タンクトップのジョガーが息をはずませてすぎる。だれかがラジカセで鳴らす私の知らない音楽が遠くから届いてきた。抱えてきた紙袋から瓶をとりだし、ウイスキーをプラスチックの小さなカップにそそいだ。手が震えて少しこぼれた。一日の最初の一杯が喉を焼いてすぎた。

秋の陽射しはやわらかく、静かに降りそそいでいた。透明な光のなか、銀杏いちようの落ち葉が平穏な

世界を舞っている。問題は無い。なにも問題は無いのだ。あらゆる人間にいつときそんなふうに見える陽射し。午前十一時の光が降りそそいでいた。

いまのところ、とりあえず私にも問題はなにもない。周囲にも問題は無い。平和な風景だった。もつとも、私や私に近しい存在がなければ、この公園もいっそう平和に見えるのかもしれない。私と同様、芝生に横たわっているホームレスが何人か見える。彼らも西口の人工灯から離れたときだつてあるだろう。私と同じように。

二杯目をそそいだ。また手が震え、ウイスキーがこぼれた。だが、しばらくすればそれもおさまることは知っている。なにしろ最初の一杯はすぎたのだ。瓶の中身がほぼなくなる夕方、私はしっかりしたまともな人間になっている。それから、きちんとではないにせよ、一応の仕事はやるだろう。この一年、同じ日課を経験している。震えるてのひらをぼんやり眺めた。

そのとき、見つめられていることに気づいた。顔をあげると、女の子が私を見おろしていた。五、六歳といった年ごろだ。赤いコートを身につけている。首をかしげて私を見つめ、私が見つめていた私の手を見る。

「寒いのか？」女の子は、そういった。

「いや、寒くない。どうして」

「手が震えてる。ぶるぶる」

私は笑った。「ぶるぶる、か。たしかにそうだ。でも寒くはない」

「じゃあ、病気なの」

アルコール中毒ないしは重度の依存症。それは病気だろうか。わからなかった。考えたことがない。

「病気じゃないと思う。たぶん」

「ふうん。そうなの。でも手が震えてちゃ困ることあるでしょ」

「困らない」と私はいった。

「でも、バイオリンが上手に弾けないじゃない」

今度は声をだして笑った。

「私はバイオリニストじゃない。ピアニストでもない。だから、不便はあまり感じない。君はバイオリンを弾くのかい」

「うん。すごく上手なの」

「どれくらい上手なんだ」

彼女はコートのポケットに両手を入れた。どんなふう to 答えていいものか迷っているようだった。ようやく彼女は口を開いた。

「んーとね。ヘンデルの三番がひける。ソナタの三番」

「ふうん。たいしたもんだ」

「わたしね、バイオリニストになるの」

「そりゃよかった」

「ねえ、わたし、バイオリニストになれると思う？」

少しのあいだ考えてからいった。

「なれるかもしれない。ツキに恵まれたなら」

「ツキ？」

「そう。幸運ともいうね」

「幸運に恵まれなくっちゃいけないの」

「そうだ」

ふうん。女の子はつぶやきながら、私を見つめた。壊れもののようなほっそりした身体つきでまっすぐに立ち、私を見つめた。私は寝そべったまま考えた。こんな年ごろの女の子と最後にしやべったのはいつだったろう。

「ねえ」彼女がしました口調でいった。「おじさんって立派な人ね」

「なぜ、そう思うんだ？」私は聞いた。

「だって、みんな、きつとなれるっていうわよ。わたしの年でヘンデルひけるの、わたしだけだもん。おとなはみんな上手だってわたしのことほめるの。でも、そんなのってバカみたいでしょ。おじさんみたいなこという人、いないもん」

「世間にはいろんな考え方があつた。みんなの方が正しいのかもしれない」

「正しくないわよ。そういう人はバカなのよ」

「そうかな。言葉はあまり軽率に使っちゃいけないようにも思える」

「どういうこと？」

「少なくとも私は立派な人間じゃない。酔っ払いの人間に立派な人はいないんだよ」

「おじさん、酔っ払いなの？ お酒を飲んでるの」

「そう。いまもそうだ」

「お酒なんか関係ないもん」

その言葉についてしばらく考えていると、ゆったりした足取りで近づいてくる男が視界に入つた。少し上だが、私に近い年齢だ。彼女の父親だろう。銀ぶちの眼鏡をかけている。それにヘリ

ンボーンのジャケットにベーズリーのアスコットタイ。四十代後半の男が休日をより休日らしくするために、そんな方法もあるのかもしれない。しかし、私のすり切れたセーターとはあきらかな距離がある。

彼は女の子の肩に手をおいた。私と私のウイスキーにちらと視線を走らせたが、表情は変わらなかった。おだやかな声で女の子に語りかけた。

「おじさんのじゃまをしちゃ、ダメじゃないか」

彼女は顔をあげ、すぐ私に向きなおった。それから口をとがらせ、私にいった。

「わたし、なにかおじさんのじゃまをした？」

「いや、しない」

男は私に顔を向け、微笑した。礼儀をわきまえた微笑だった。

「女の子も、このくらいの年になると生意気になって……」

「ふたりで世の中の真理について話していたんです」

男はあいまいな表情になった。「それはどうも。なにやらご迷惑をおかけしたようですね。た

いへん失礼しました」彼は、娘の手をとった。「さあ、行こう」

女の子はささやかな抵抗の素振りを見せたが、父親にしたがった。ふたりが歩み去っていくとき、彼女は私をふりかえった。もう少しなにかをいいたかったように。私も同じ気分だった。女の子に向けて小さく手を振った。彼女は、はにかんだような笑みを返した。それから父親の手を離れ、どこかへ駆けていった。

私はときに差別を受ける。身なりで。昼間から酒臭い息をしていることで。それには慣れている。理性で差別を抑える心の動きにも慣れている。しかし、最初から差別と無縁でいることので

きるものも世界にはある。まれにしか出会わないがそういう存在もある。

ぼんやりと酒を飲み続けた。小さな女の子の言葉について何度か考えた。それは甘い歌声のよ
うに頭のなかで響いた。お酒なんか関係ないもん。

カップを口に運ぶ回数を数えなくなったところ、今度は若い男が近づいてきた。髪を茶いろに染
め、胸にチラシの固まりを抱えている。その一枚を私にさしだそうとした。

「神様についてお話しませんか」と彼はいった。

「申しわけないが、いま仕事中なんでね」

「仕事？ なんの」

「これだよ」酒瓶をふった。「プロの酔っ払いでね」

「珍しいお仕事ですね」そういつてから彼はニヤツと笑った。「やるじゃん、おっさん」

若い男はうなずいて、去っていった。

私は首をふった。彼に説得されて目覚め、信仰の道に入る者はいるだろうか。いるかもしれない。
い。新宿という街では、なにが起きても不思議ではない。神様だって不思議には思わないだろ
う。さらに飲み続けた。手の震えがようやくおさまりはじめた。寝ころがったまま、仰向けにな
った。空には数本の細い雲がたなびいているだけだ。陽射しは相変わらず透きとおりと、やわらか
く降りそそいでいる。視界には周囲に林立するビルがあった。都心の真中にある公園。その陽だ
まり。それが奇跡のように酒を飲む場にふさわしい。

その音を聞いたのは、うとうとしはじめたころだった。地響きが伝わり身体が浮いた。続いて
悲鳴が重なった。なにかが私に語りかけた。起きあがった。腹にずしりと響くその音を私は知っ
ている。

爆薬の炸裂。

煙がたち登っていた。その方角から大勢の人間が走ってきた。彼らは一様になにか叫んでいた。だが、なにを叫んでいるかは不明だった。中年の女がふたり、悲鳴をあげながら私の横をすりぬけていった。老人のグループがよたよた駈けてくる。その流れと逆にいつのまにか走っていた。新宿署は近い。時間を計算した。一分半。たぶんそれ以上の余裕はない。公園の中央に出た。一段低くなった噴水のある広場。左にある地下鉄工事用施設の壁と天井が吹きとび、鉄骨がむきだしになっている。それで広場が見渡せた。

一面に人が倒れていた。右手にはコンクリートに水の流れる人工の滝があり、その下、水際のそばに陥没ができていた。そこから黒い汚れが半円になって放射状に走っている。そのあたりでは、人間以外にも散乱しているものがあつた。かつての人間の一部分。裂けて原形を失つたもの。肉と血だ。石段を降りるとき、折れた枝のようなものが目に入った。最初、わからなかった。不自然に折れ曲がっていたのでわからなかった。根元からちぎれた腕だった。爪がワインレッドにきれいにマニキュアされていた。階段のすぐ下では、男がすわりながら祈るように自分の腹を抱えていた。その腕からやわらかいなにかがたれ、鈍いいろで光っている。はみでた腸だった。走る私の視界にそんな光景がすぎていった。呻き声が重奏低音のように広場をおおい、ときおり絶叫がひと筋混じる。

爆心に向かい、走った。探すべき人物がひとりいた。この公園に残っていないことを願った。あれは何分まえだったろう。いや、時間単位か。そのとき、広場からだれかが向こう側の石段を駆け登るのが見えた。爆発の被害を受けた人間ではない。この惨状に興味を持つ人間が私以外にいるのかもしれない。周囲には死者と死者の破片が散らばっていた。四肢を失った胴体があ

り、半ばねじれた頭がそれにつながっていた。足が一本、ゴロリと転がっていた。骨の見える別のだれかの片腕が冗談のようにその上に乗っている。なにかも焼けこげ、黒ずんでいた。そして血まみれだった。ごく短い時間にその光景が私の目に焼きついた。そのあたりには息絶えた者たち、絶えつつある者たちしかなかった。硝煙の名残りのなか、彼らのあいだを走った。血の流れが何本か、蛇のようにうねって伸びた。それをぬって走り続けた。鼻をつく刺激臭があった。私を知る酸っぱい種類のにおいではない。そのなかに血のにおいがたちのぼっている。爆心から離れた、駅に面した側から呻き声が届いてくる。相変わらず透明な陽射しが降りそそいでいた。だが、世界はほんの少しまえて同じではなかった。一瞬にして狂ったのだ。いや、最初から狂っていたのか。呼び起こされる記憶があった。沼の底から浮かびあがる泡粒のように甦よみがえってきた。それを頭のなかから締めだした。

走りながら、爆音を聞いてからの時間を考えた。たぶん、一分くらい。タイムリミットだ。あきらめかけたとき、赤いコートが目に入った。広場の反対側、コンクリートで囲まれた植込みの陰にバイオリンの得意な女の子が倒れていた。意識はなく、顔が青ざめている。額から血が流れていた。しかし爆発が直接与えたものではないようだった。爆風で倒れたとき、どこかで打った裂傷だ。爆心からそれほど離れていない場所としては、奇跡に近い。身長以上に高さのあるコンクリート囲いが彼女を救ったように思われた。ただ内臓に損傷があるかどうかはわからない。首筋に手を当ててみた。脈に乱れはなかった。君にはどうやらツキがある。口にだしてつぶやいた。彼女を抱きあげ、近くの石段を登った。

人がいた。黒っぽいスーツに身をつつみ、サングラスをした男の後ろ姿があった。私の気配を感じたのか、すっと木立ちのなかに姿を消した。さっき階段を登っていった男かもしれない。私

は男を無視した。サイレンの音がかすかに湧きあがっていた。優先課題は別にある。周囲を見回した。少しまえ、私に声をかけた茶髪の若い布教者が地面にすわりこんでいた。目が空ろで口からよだれが流れている。私は男の頬を平手で殴った。

「大丈夫か」

「え、ああ」男の目にゆっくり焦点が戻った。それからようやく私に気づいたようだった。「なんてこった。いったいどういう……」

男をさえぎった。「あんたは大丈夫だよ。ショックを受けてるだけだ。たぶん、この子も助かる」

「え」

「この女の子も助かるんだ。あんたにまかせる。神様に祈るだけじゃない。救急車が来たらこの子を真っ先に預けるんだ」

「なんでおれが……」

男をもう一度殴った。

「いいか。この子に万いちのことがあったら、あんたを殺す。覚えておいた方がいい。嘘じゃない」

「おれは……」

男の言葉は最後まで聞かなかった。ふりかえらず、その場をあとにした。陸橋を走ってわたった。途中、ふたりの制服警官とすれちがった。彼らは私に呼びかけたが、その内容はわからない。すでにサイレンが音量を競いあうようにふくれあがっている。私は後方の公園を指さした。彼らはうなずいてそちらに駆けつけた。都庁のそばに群がるやじ馬にまぎれこんだとき、パト

カーが重なりあつて公園をとり巻いた。通りをはさんだホテル下の陸橋を警官が走っていた。公園の正面入り口の開口部あたりには、教台のクルマが壊れてとまっている。駅の方からさらに何人かの警官が駆けてきた。新宿中の警官がこの場所をめざしている。その姿をやりすごしてからようやく大きな息をついた。息切れしていた。公園に背を向けて歩きはじめたとき、あることに思ひいたった。あの若い布教者は私のことをいはずれ警察に話すにちがいない。ウイスキーの瓶とカップを忘れた。そこには私の指紋が残っている。生乾きのコンクリートを踏んだ足跡のようにくっきり残っているはずだ。警察に保存されたものとの一致がわかるまで、それほど時間はかからないだろう。